

The 3<sup>rd</sup> International Society of Caring and Peace Conference in Kurume

*Honorary Lecture*

Ryosuke Inagaki (Kyushu University, Professor Emeritus)

人格と交わり 稲垣良典

只今ご紹介いただきました 稲垣でございます。本当は原稿を読まないで皆さんの顔を見ながらお話しするのが本筋ですが、最近の話の途中で脱線することもありますので本日は原稿を読むような形で皆さまにお話しをすることにしました。

I. はじめに

今日3月25日は教会のカレンダーでは神のお告げの祭日になっております。2000年前にパレスチナのガリレア地方の小さな町の一人の乙女マリアに突然神から使わされたガブリエルという天使が現れまして、マリアに向かって、最初にラテン語で「アベマリア」と呼びかけました。「アベ」とはこんにちは という意味ですが、ここでは特に喜びなさい、おめでとうという意味が含まれているのだそうです。「あなたは身ごもって男の子を産む。生れるのは聖なるもの神の子と呼ばれる」と告知したと言われたと福音書ルカによりますとこう記されております。今私がなぜこのような話を持ち出したかと申しますと。私は最近になってやっと古い時代、日本でいいますと弥生時代の前縄文時代、紀元4世紀5世紀のアウグスチヌス時代の聖書、注釈の書物に身を入れて読むようになり、今さらのようにマリアのお告げの背後にある神様の細やかな、慈しみ深い配慮、まさしくケアを読み取るべきことを学んだような気がしたからであ

ります。ルカ福音書によると、当初、乙女マリアは驚き、当惑して、どうしてそのようなことがあり得ましようか？という反応を示したのでありますが、ガブリエルによる適切な説明、助言に助けられて最後には「私は主のはしためです。どうかそのお言葉のとおりこの身になりますように」という完全な謙遜といえますか、信仰をもってこの救いの歴史における最も重要な役割を引き受けたという風に記されております。ところがこのマリアは神のお告げをしっかりと受け止めたということによって救い主である神の子がこの世界にお入りになると、道が開かれたと信ずる人々の主な関心は、マリアが神の子を身ごもったということ、キリストの母となったこと、マリアの身に起こったことだけを大事にして救いの歴史における最も重要な役割を選択したマリアが引き受けたという その背後にある乙女マリアのたぐい希なる謙遜、信仰それがこの場合一番大事なことではないか そしてそのマリアの謙遜とか信仰がまさしく神の恵み、つまり神がマリアに使者を遣わしマリアに与えた慈しみと哀れみ深い配慮、つまり神のケアそのおかげではじめてマリアは「私は主のはしためである」という言葉で自分に与えられた使命を引き受ける選択をしたということはマリアのお告げの大事さを信ずる人たちの間でもあまり注目されないようです。

このような神の働き、神様の行為としてのケアについて語るのはケアリング プラ

クステイスというメインテーマにおいて行われる学術集会には不協和音ではなかと批判されそうですが、しかし私は「ケアの人間学」という書物を書いた私のところで勉強した人ですが、浜口という今大阪大学で教授をされておられる方がお書きになった本ですが、「人間はケアしケアされる存在」として定義できると、そういうことを言っているわけです、それほどケアという行為は人間性に深く根ざしているものであります。更にケアしケアされると相互的あるいは互恵的なその関係は決してギブアンドテイクといった合理的なレベルのものではなく、浜口さんの言葉によれば共通の何か大きな宇宙的な生命の営み、聖なるものあるいは人間の実存にかかわるそういう領域に属することと受け止めるべきだという訳です。しかし私の感じでは回りくどい説明、解説するのではなく、もっと端的に人間はすべて非常に大きな避けることの出来ない悲惨な状況と言いますか避けることの出来ない苦しみを皆が抱えこんでいる、つまり人間はすべて憐みを必要とする存在であるというこの現実と直面するところからケアというものを考えたらいいのではないかと考える。つまりこの世界にはケアを与えるだけでケアされることを必要としない人間は存在しないのではないか、この明白な現実からして「人間は本質的にケアしケアされる存在である」と言いきってもよいのではないかと私は不思議に感じたわけです。

この観点に立ってケアリングとプラクティスというテーマに私どもが立向かう時に、我々は人間と人間との間で実践されるケアしケアされるという人間社会の根本的な秩序というものは究極的には我々すべての人

間を慈しみと憐みをもって見守る神のケアによって満たされたものである。そう考えるのはそう偏った突飛な考えではなく自然ではないかと私は考えるわけです。先頃の東日本大震災の悲惨な状況を目撃した人達の多くが思わず発した、口にしなくても心で思われた「神様はどこにおられるのか」「一体神様はおられるのか」という嘆き叫びというのはまさしく私たちの心の奥深いところに、このような神のケアについて本性的に、私どもの中に知識、認識を秘めているということから、こころの奥底で「神などどこにもいない」ということを口にする人にとってもどこかで、すべての人間の憐れみを見守っている神の存在を認めているのではないか、「神様はどこにおられるのか」という心の叫びが出てくるのはその証ではないかと私は思うのです。それでこのような学術集会で神のケアというものを語ることもそう間違いではないのではないかと考えました。これは今日お話しする前置きであります。

## II. ケアと愛

まず「ケアと愛」についてお話ししたいのですが、これは私が最初にアメリカに何年か前に留学した時に感じたことですが、care ケアということばと love ラブということばの使い方の難しさというのが私の頭のどこかにございまして、私はケアという言葉を使い損ねて友達の怒りを持ったことがございます。やはり、I care, I don't care という言葉はとても注意して使わなくてはならないのではないかと思ったことです。ここではもっぱらの問題である介護という意味のケアとは違いますが。私どもの自然

な人間性に根ざしたこころの働きとしてのケアというものを私は語りたいと思うのです。まずケアというものがどういうものであるかとうことをはっきりさせるために、おそらく非常に似通っていると思われますケアと愛についての関係について最初にみていきたいと思います。ケアすること、ケアリングというのは根本的に人間が社会の一員としてというよりももっと根本的に人格としてパーソン **person** としての行為であることを最初に強調したいと思います。我が国では人格ということばと **individual** 個人と **person** パーソンということばはほとんど同じ意味で使われている 代表的な例として日本国憲法でも人格ということばはあまり出てきませんが、例えば教育基本法には個人ということばと人格ということがほとんど入れ代えることができる意味合いで使われております。そういうことで、人格の尊厳というということばはあまり言われなくて個人の尊厳、個人を尊重すると使われております。しかし私は尊厳ということばは人格について本来的に使われるべきことばで個人の尊厳ということばはあまりふさわしくないと考えております。つまり人間の尊厳というのは人間社会をあるいは人間共同体を構成している一員、一部分としての個人ではなくてその場合、人間は目に見える自然界の一部として考えられていて、しかも周りのすべての生き物と共生して生きるべきものとしての人間と考えられていると思うのですが、そういう意味で人間についての尊厳を語るのではなく、むしろ人間が物理的な自然界の存在としてではなくそれを超越した精神的な存在としての尊厳として、その価値が理解されまた語ら

れるべきではないかと思います。少し堅苦しい狭い考え方ではないかと思われるかもしれませんが、なぜ私はそのように考えるかと申しますと、その人格の特徴として誰もが考えるのは人格は自由な存在である、自分で自分のことを決める自律的な存在であるからという意味で人間は自由であるというのですが、しかし精神的な存在としての人格というだけが妥当するのではなく、他のすべての人間から区別されるこの人間としての個人、個人というのは唯一であるたとえナンバーワンではなくオンリーワンであるということが有名になっているようですが、ただこの人だけ、一人だけということばで人間の尊厳、価値ある存在としてはどうしても考えられない。

ほんとうの意味での自由について考えますと、自由な存在として人格を私は理解するのですが、人の自由を考えると人間は生まれながら自由であるというルソーの言葉を信じて人間は自由だというのですが、本当の意味で人間が自由とはどういうことでしょうか。ただ何でも選ぶことができるのか、あれもこれも選ぶことができるからでしょうか。これもあれも選べることができるという宙ぶらりんな状態を自由と呼ぶのでしょうか。そうではなくて自由というのは何か絶対的な価値に自分が結びついていて、それをひたむきに求めているそれと結びつけられている そういう自覚がある時には他のさまざまな価値については、私たちはどれにも固執する必要がない固着する必要がない。もろもろの相対的なものについては **indifferent** である。固執せずにする。それらから自由になるという意味で自由というものを考えるわけです。ほんとうの自

由は絶対的な価値をおくもので漠然としていても自覚してそれに比して相対的な二次的な価値については自由になる。自由についての相対的な価値よりも絶対的な価値に結びついていることがほんとうのつきつめた考えた自由といえる。そうしますと人間の絶対的な価値とどのようにして結びつくかといいますと人間の知的な働き、知るとか愛するとかという人間の知的な働きを通じて絶対的な価値と結びつけられるわけです。そういうふうな精神的な営みをもつ存在としての人格であると、そういう働きがすべての自然的なものを超越するような価値をそういう人格について私たちは語るべきではないかと考えるわけです。

ところで人間の人格性が最も顕著に表れる行為が愛すること愛ではないかとも言えるとする、愛とケアとはどういう関係にあるのでしょうか、私は愛についての書物はそう沢山読んだ訳ではありませんが、一番印象深く読んだのは CS ルイスというイギリスのルネサンス時代の英語、文学の専門家ですが、我が国ではナルニア国物語の著者として有名ですが、その CS ルイスが書きました「4つの愛 The Four Loves」という小説がありますが、それによると、愛には4つの要素があります。つまり愛情 affection、友情 friendships、恋愛 Eros、聖なる愛 charity、愛には4つの要素が含まれているというのですが、ここで仮にケアを愛の一種と考えるとすると4つの愛、愛情、友情、恋愛、聖なる愛のいずれにも Gift love 与える愛、Need love 必要とするからひたすら受け入れる愛、appreciative love 何かを本当に大事であると認めてそれに惹かれる愛、この3つの要素が含まれて

いるとルイスは述べているのですが、ここで仮にケアを愛の一種と考えるとしますとそれは appreciative love の要素が非常に強い affection と言えるのではないだろうか。

ケアという行為はケアする相手を大切に、気遣うという愛でありますし、そして慈しみ深い愛としてのケアが、気遣うあるいは大切にすることは何かというと相手の弱さや相手の被っている様々な苦しみとか、欠陥とか惨めさではないでしょうか、それを気遣うそれを大切にすることこれが一番大事です、それとともにケアが何よりも惨めさあるいは苦痛、苦しみそれらを被っている人の惨めさ苦しみというものを共有するコミュニケートという言葉がありますが、コミュニケートとは相手と言葉を交わすとか会話するということですが、もともとは共にするという特に大事なことを共有するということが本来の意味であります。私たちが苦しみを共有するという態度で相手の苦しみに向かう時に、その苦しみ惨めさを共有すれば、人格的な交わりによってそのおかげで相手の悲惨なものが何か美しいものになるのではないのでしょうか、美しいというのは奇麗というのではなく私たちにとって一番尊いそしてそれを大事にせずにはおられないと感じることをさして美しいと言っているのですが、そういう相手の惨めさを共有するというその言葉は憐み深さというのですが、その相手の misery 此の悲惨を共有する、Misericordia というラテン語がありますが、このことばは憐み深く相手の悲惨な状況を共有してそれを自分のものとして受け止めるころ、これが憐み深さと言います。普通憐みといいますと、何か相手を見下しているような態度

に思われがちですが、それは憐み深さのことばについての誤解だと思います。すべての人間は根本的に悲惨さミゼリー *misery* というものを抱えている。そしてそれはケアを必要とする存在であること、それを必要としない、ケアすることを必要としない人間は一人も存在しないと、そういう観点から考えますと相手の *misery* 悲惨さを共有するという憐み深さということは決して相手を見下しているわけではなく、むしろ私達は誰もがケアされることを必要とする存在であるということを自覚したうえで、端的に申しますが「自分がケアしている相手からケアすることで何か最も尊いものを頂いている」という、そういう謙遜さを学ぶべきではないかと私は考えます。憐み深さというのはそういう意味でケアの本質になるのではないかと思うのですが、それは慈しみ深い愛と言いかえることが出来るものであって、そのことからケアの本質であると言えるのではないかと思います。私は人格という言葉は何度も使っているのですが、次に人格というもののパーソン *person* についてどのように理解しているのかお話しをしたいと思います。

### III、人格の中核としての *Communication* (交わり)

人格はラテン語ではペルソナといますが、この言葉については語源的な説明がなされておりますが、私たちに親しい説明として和辻哲郎という日本人の哲学者が「面とペルソナ」というエッセイで指摘しておりますが、ペルソナは役者が自分の役をあらかじめ如述に示すものとして面をペルソナと言っている訳であります。このよう

に語源的な説明からペルソナという言葉は古代ローマ法にも出てくる法学的な意味をもつ言葉ですが、さらにキリスト教神学の中では三身一体論とかキリスト論の概念として神学的な説明があります。私自身は人格という概念、あるいはペルソナという概念に関心をもったのは若いときで大学院を終えてから最初に公にした論文が「トーマス・アキナスにおける人格の統一性」について *unity* の概念について 1956 年に発表した論文ですが、それ以降もほそぼそと人格という問題には関心を持っておりました。今から 8 年前 2009 年に「人格 (ペルソナ) の哲学」という書物を書いておりますが、それをまとめとしたかったのですが、しかしまだ未熟で不十分でした。そこで、特にまだ不十分だったのはこういう事です。哲学の歴史では人格というのは人格を人格たらしめるのは、この唯一独自の個別者を人格とよんでいたのですが、先ほど個人については触れましたが、それは他の何者とも共有不可能な、何者ともコミュニケーション出来ないような存在であることが人格であると哲学では説明されてきました。しかし私はそうではないと、人格は精神的な存在である限り、交わりにおいて存在する、交わりにおいて生きている、交わりにおいて行為するという存在であると、そこまではその書物で書いたのですがさらに進めて人格というその中核にあるものが交わりであると最近考えるようになりまして。そのことをまだ明らかにしなかったので、2009 年に発表した論文は不十分だと思ったわけです。

そして今日、皆さまにお話しするのですが、人格の中核として核心としての交わりというのはこの数年考えてきたことに基づ

いております。私は自信をもってというよりは皆さんに是非ご批判を頂きたいと思って今日そのお話しをするわけでございます。つまり私が人格というものの中核はこれ以上分割できないこれ以上分けられない点、ポイントというようなものではなくむしろ交わりである。そう考えるようになったきっかけが二つあります。一つはキリスト教神学では神は「一」である。キリスト教やユダヤ教、イスラム教は一神教であると申しますね、唯一の神を信ずるといことが言われていますが、神は「一」である、しかしその「一」ということは私たちがものを数える時の一（ひとつ）ではないのです。一神教は偏教であると他の神を受け入れられないと批判する人がいますが、キリスト教の「一」であるというのは、決してそういうものではない。

キリスト教では3つのペルソナ、親、子、霊であると申します。この3つのペルソナを区別するという点において神は「一」であると、そのことはむしろ神の本質を言い表している。神が「一」であるということは神秘的なものでただ1, 2, 3と物を数えるような一、ではないということは前々から承知しておりましたが、神が「一」であることばが3つのペルソナを区別することを意味するという事、「一」ということを理解するようになったのはごく最近のことです。先ほど申しましたアウグスチヌスが書いた三身一体論とか 下って中世になって、私はクリスチャンになるときに洗礼の時に名前をうけますがその時にベルナルドの名を頂くのですが、ベルナルドは12世、トラピストの修道士でベルナルドが書いた書物の中に三身一体は神が「一」であるという説教

を何度か読んだりしましたが、トマス・アキナスが神学大全という書物の中でトマスは神は「一」であるというのを読んできましたが、トマスが神は何であるかを論ずるときに神は「一」であるというのを一番最後にもってきているわけです。神は無限であるとか神は最高の善であるとか神は居たるところに存在するとか神は絶対に変化しない不可変であるとかそして永遠であるとか言ったあとで それらを総合して神は「一」であるとトマスは言っております。そしてそこからすすんで三身一体論を締めくくりとして神は「一」であると申すわけです。しかし我が国でもキリスト教の三身一体であるという教え、神は3つのペルソナをもつという教えは一神教ではなくあれは多神教であると言っている神学者、宗教学者もいますが、あれは間違いだと思います。

ペルソナというものの根本には交わりがあると言う風に考えるようになったのは、神が三身一体であるということ神が「一」であることが少しわかったとは申しませんが、その意味を味わったということで私が人格についても考えをある程度自分のものにするようになった次第でございます。もう一つ人格というものの核心には交わりがあると考えるときは最近になって自己認識とか自己愛という問題について以前よりもよく考えるようになったのですがそのうちに私達が自己を知る、自己認識をする。私達はよく自己紹介というものをやりますね、私は自己といってもそう簡単にわかるものではないと思いますので、自己紹介しろと言われてもそれは出来ないと思っております。これは冗談ですが、むしろ他の人に稲垣はこういう人間だと言ってもらった方が

はっきりすると言いますが、私は自己認識とか自己愛というものを考えているうちに私が一人称単数代名詞の私ということばで呼んでいる私は自己とは一体何だろうか、ここで私は私と申している私を皆さんはみているが、皆さんは稲垣という私を見ているわけですが、皆さんに私は見えないわけです。私は私ということばで何かがあるということばで自覚しているのですが、私という私は皆さんには見えないわけです。何かがあるということばで、私が私であるということばで「一」であると言っているのです。私が他でもないここにいてという意味で私がある、私という一人の「自己」があるわけです。しかし私を私が知るという時に二重性があるわけですが、そこには二人の私がいるのではなく、私は一人の私であることつまりそれはどういうことか考えると非常に難しいわけです。知る私と知られる私、愛する私と愛される私、あるいは皆さんもそういうことはよくおっしゃることですが、自己に打ち勝つということ、あるいは今日も決心したのですが負けて煙草を吸ってしまう。自分に負ける場合、どちらがほんとの自己ですか？負ける自己ですか？勝つ自己ですか、そういう質問はばかげていますよね、自己というのは皆さんよくご存じご承知である、そうすると私たちはごく当たり前のこととして知る自己と知られる自己、愛する自己と愛される自己、勝つ私とそれを勝たせる私がいるということ、しかしここには二つの私がいるのではないかと迷うことはない。

例えば、学校で学んだと思いますが「汝自身を知れ」という有名なソクラテスのことばですが 知恵の神アポロのデルフォイの

神殿に刻まれていることば、「汝自身を知れ」あるいはキリストの福音書の「隣人を己のごとく愛せよ」つまり己のごとく愛せよとは、当然、己を愛するということがそこに理解されているわけで、誰でもしかし「汝自身を知れ、己を愛する」と聞いてもそれは確かに汝自身とは何かを知ることはとても難しいと感ずる。己を愛するように隣人を愛するということは難しいと感じておられるが、しかし自己を愛するということについてはそれはどういうことかということとはそれほど思い悩むことではない。そこで私たちが自己について区別しながら、それが「一」であるということには何も疑いを感じていない二重性がありますが、知る私と知られる私があるという時にはそれが「一」であるということについては何も疑問を感じていない。しかしそれが「一」であることを決して疑っていないということはこの私の二重性というのは私たちにとって親しいことでありながらそれがどういうことかと考えると難しいことで、もう神秘としか言いようがないことなのですね。

少し脱線しますが、私達は日常の生活の中でとてもあたり前で誰もが知っていることでもよくよく考えるととてもわからない神秘的だということがいっぱいあるが、だんだん年を取るにつれて考えてもしようがないから忘れてしまいか無視してしまう。しかしそれを忘れないで問題にするのが哲学者なのです。哲学する者は、誰もが承知しているようなことをそれは何かと考えるのですが、それが何であるのか理解しようとすると果てしなく難しく、それはなぜなのかと考えても神秘としか言いようがないものがいっぱいあります。そのようなものの

一つに自己としての二重性、それは単なる二重性ではなく交わりとして理解するべきではないかと。そうすることによって私達は人格というものをよく理解できるのではないかと考えているわけであります。

つまり私たちが自身の自己というものは常に二重性がありますが、交わりが含まれている。私たちは当たり前である、神秘的であると申しましたが、それは優れた在り方、優れた存在の在り方だと思います。なぜかと申しますと何かは今ここにあるというのは、皆さんはお分かりになる確実だと、すべてがそこから始まると考えている。しかしよくよく考えてみますと今ここにあるというのは限られている。それは限定され特殊化されたあり方ですね、しかし私が私であるという自己の二重性、そのあり方というのはほんとに自己においてある、存在している自己が確立される訳ですね。それは優れた存在の仕方であると言っていいと思います。

人間の本質からして社会的であり共同体を形つくりだし生きているのは人格の核心である交わりのおかげであると思うのです。この交わりというパーソンとして存在の中核としてありながらすべてのものに対して開かれている交わりなのです。私自身として私の中心にありながらすべてのものにかかれこの交わりはどこまでも広げていけるような交わりである。それによって私達の社会はなりたっている。「人は人にとってオオカミである」だから我々は国家を作って人の権利を守っているのだと政治学者のホブズは申していますが、しかし「人は人にとってオオカミである」という言葉はこれは紀元前のローマの喜劇詩人が言った言葉で

あまりそう真面目にとらなくていい言葉です。もっと大事なことは「人は人にとって友である」人は本性的にもう一人の人にとっては友であると哲学者アリストテレスは政治学の書物で言っていますが、人間の真実を言い表していると思います。

ケアというものはこの人間の社会的本質、人格の根源的である交わりに基づいているものであり、それをすべての人に広げていくのがケアであり、ケアというものが全ての人に広げて世界を作り出しているのではないかと思います。

#### 4. おわりに 「旅する者・人間」

最後に人間は本質的にケアしケアされる存在である。その人間とは何であるかを考えることによってこれまで人格に特有の行為、あるいは働きとしてのケアの概念をはっきりさせたいと思います。

人間のこの地上における生活、生は根本的に旅である。そういう意味で人間は旅するものであり旅の途上にあるものと理解しております。人間は旅するものですから生涯を通じてケアを必要としている。旅は道連れともいいますが、ケアを必要とするのは人間が本質的に旅する者である。さまざまな困難やさまざまな危機を切り抜けて確実に目的地へとむかわなければならないことからケアを必要とし、また旅することを学ぶために私たちはケアというものを身につけようとしている。

この学会が掲げる理念は「ケアリングと平和」と受け賜っておりますが、人間は本質的に旅するものであることから旅するものにとってケアリング無しでは平和はありえないものです。そういうことを考えますとこ

の学会が掲げております理念は尊いものがあります。私達は旅というものが安全で快適であることを願ひその為にいろいろ計画し配慮します。これはごく自然な願ひであってさまざまな配慮、道連れに対してこころ遣いをそれは美しいものであり称賛するものです。しかしケアはそのような側面、そのようなレベルにとどまってはならないと思います。つまり私たちが申しますその旅する者とする人間の旅は気ばらしやレクレーションではなく本当の旅、最も必要なことはその安全で快適な旅ということばかりでなく目的地に到達することが旅の肝腎なことです。そして私たちが目指しているのはたしかに目的は平和であります。私たちが辿っている旅路が安全で快適の一時の憩いの平和ではなく目指す目的地、人間としてのその究極の目的は本当の意味で幸福に到達したときに得られるやすらぎ、その憩い、永遠の休息とも言えるものですが、休息ということばがありますが決して眠りではありません。人間の最後の幸福はやすらぎや眠りではないと思う。人が亡くなる時に死者をとらうときに、どうぞ安らかに眠ってくださいというのですが、それには腹が立つのです、人間の最後の幸福、やすらぎはもっと豊かな旅の収穫であり報いあります。旅の最後の目的地に到達するためにケアを必要とするのです

ケアリングと平和の理論はとても尊いものです。「ケアリングと平和」を掲げているこの学会であえて人格とは何か 抽象的な問題としてケアを取り上げたのですが、ケアを必要とする人間がケアされるだけではなく、つまりケアするものがケアするだけではなくケアすることで尊いものを自分は

受け取るという態度を学ばなければいけないと思います。私達自身がケアしケアされることで 私たちがいわば人間性を耕し、カルチャは人間性を耕すということだと思ふので、そして人格を形成しそこで人間とは何かを理解を深めていけるのではないかと思ひました。あえてこの学会で人格というテーマを取り上げた次第です。

これで失礼します。